

J Aグループの農業労災の安全対策と 労災補償対策の取り組みの実態・課題と今後の展開方向



HADANO Japan Agricultural Co-operatives

20. October. 2023

神奈川県 秦野市農業協同組合 宮永 均



はじめに

日本農業労災学会の主要研究成果等への対応
日本農業労災学会の提起する構築方向に
JAグループがどのように対応できるかが正念場
組合員健康管理活動にJAが取り組む意義
都市的農業地域に立地するJAはだのの取り組み



日本農業労災学会の主要研究成果等への対応

- JAグループは、日本農業労災学会の研究の成果を活用・実践しつつ「実践農業労災学」の構築方向へ対応することで、農作業事故防止と補償確立につながると確信しております。
- ここでは、日本農業労災学会の主要研究成果「事故発生要因の分析」により最も事故の多い、トラクター事故の様態についてを最重要課題として、JA全中主導の下、JAはだの管内でナッジ手法に基づいて調査した内容について報告します。



日本農業労災学会の提起する構築方向に JAグループがどのように対応できるかが正念場

- 「実践農業労災学」の構築方向として
 - (1) 理念と目的
 - (2) 実践的な労働安全活動支援手法の開発
 - (3) 労働安全活動のための組織論構築
 - (4) 事故情報の一元化と解析システム・事故防止マニュアルの開発
 - (5) 労災保険特別加入促進システムの開発
 - (6) 法制度の整備に関する基礎情報の提供
 - (7) 農作業安全教育システム・教材の開発と活用方策



組合員健康管理活動にJAが取り組む意義

- JAのミッションは、「JA綱領」で明確に示すように「地域農業と地域に根ざした組織としての社会的責任を誠実に果たす」ことです。
- すなわち（1）地域農業と組合員の農業経営を支え発展させる役割と（2）組合員の生活を支え住みよい元気な地域づくりに貢献する役割を誠実に果たすことです。



都市的農業地域に立地するJAはだなの取り組み

- この2つの役割を有機的に関連づけ、一体的に取り組むことが必要であるとの考えのもと、そのような視点を重視した協同活動の一環として、病気予防・農作業事故未然防止・食による健康増進を目的として、組合員をはじめ地域における健康管理活動を実践します。





- JAはだのは、引き続き神奈川県厚生連と連携して組合員の「健康」を支えていきます。
- 農作業事故未然防止への取り組みは、春・秋農作業安全運動をはじめ、JAグループの一員として役割発揮に努めていきます。
- 組合員の健康増進における病気予防策は、20歳代から生活習慣病の兆候が表れるとされているため、若いうちから健康診断の重要性を認識してもらうよう呼び掛けるとともに、人間ドックなど健康診断の受診率向上に努めていきます。



- 「農作業事故未然防止」は、毎年、春・秋農作業安全推進運動、GAPの労働安全管理手法の活用など、具体的取り組みを農業労災対策委員会で協議し、組合員・生産部会組織を通じて、組織の各段階で農作業事故未然防止の取り組みを強化します。合わせて農業労災保険特別加入の必要性を組織内で共有化し、加入率向上をさらに目指しています。
- 「食による健康増進」は、食と農と地域をつなぐ愚直な活動を通じた食文化伝承による健康増進活動を実践しています。



J Aグループの農業労災の安全対策

第29回 J A全国大会決議

J A全共連の農作業安全の取り組み

J A全農の農作業安全の取り組み

※引用

第29回 J A全国大会議案書 「多様な働き手への支援と働きやすい環境整備」 28頁

J A全農「農作業安全の取り組みについて」

J A全共連「零話5年 秋の農作業安全確認運動推進会議：農作業安全の取り組み」



【JA全中】第29回JA全国大会(議案書抜粋)

多様な働き手への支援と働きやすい環境整備

- JAは、生産現場における衛生環境の改善や就業時間の柔軟化など女性やマルチワーカーなど多様な働き手が参加しやすい農業環境づくりをすすめるほか、労働関連法令のコンプライアンス順守に取り組むなど、農業者の雇用意識の向上等による働き手の目線に寄り添った農業版働き方改革に取り組めます。
- JAは、農業における死亡事故の発生率が他産業と比べて突出していることから、行政・関係機関等と連携して農業者への農作業安全対策の励行を啓発するとともに、労働保険制度およびこれに上乗せする保障制度の活用・普及に取り組めます。
- また、外国人材活用の取り組みにあたっては、特定技能外国人材の活用をすすめるとともに、技能実習生を含め外国人材の適正な受け入れに取り組めます。

【JA全共連】令和5年 秋の農作業安全確認運動推進会議


- JA共済では、組合員・利用者の「安心」と「満足」の実現を目的に、農業者の生活と事業を守る趣旨から共済事業を実施しています。
- 近年の農作業安全のための取組みについて、以下3点をご紹介します。
 - 共済事故データに基づく農作業事故の分析
 - 農作業中の事故を疑似体験できる「農作業事故体験VR」を活用した学習プログラムの提供
 - 共済仕組みとしての「安全性の高い農業機械（検査合格機）に対する掛金割引」



【JA全農】令和5年 秋の農作業安全確認運動推進会議

組合員研修：農作業安全研修、セルフメンテナンス研修

- ・JAグループは農機事業では、関連機関と連携し、春と秋のシーズンに「農作業安全月間」を定め、農作業事故防止に向け、農作業安全啓発活動につとめています。
- ・JAや経済連・全農都道府県本部では、農機展示会での農作業安全コーナーの設置や農作業安全講習会の開催等、それぞれのJAや県で工夫して農作業安全啓発活動を実施しています。

- 
- ・経済連・全農都道府県本部が主催の展示会は、6月～8月、10月～3月にかけて開催されています。その他、JA農機展示会では、農作業安全こうな一を設置しているところもあります。
 - ・JA全農では、農作業安全講習会等で活用できる資材を作成し、農作業安全啓発活動を支援しています。



J Aグループの 労災補償対策の取り組みの実態・課題

J A全中・J A共済連・J A全農の農作業安全の取り組み

【JA全共連】農作業事故体験VRの活用

- 共済事故データに基づく農作業事故の分析を行い、農作業中の事故を疑似体験できる「農作業事故体験VR」（JA全共連開発）を活用し、農機展示会や農作業安全講習会にて安全啓発を行う。





【JA全農】 広報・安全教育・メンテナンス講習会

- 農作業安全チラシの作成・配布：春（3～5月）、秋（9～10月）を重点期間として、安全啓発チラシを作成し各県へ配布。

慣れた時こそ安全確認を怠らず!

シートベルト、ヘルメット **ヨシ!**
 機械の整備状態、服装 **ヨシ!**
 安全フレーム (または安全キャブ)、低速車マーク、反射器 **ヨシ!**

農機事故発生状況 (2019年)

発生場所	発生件数
田舎	171件
市街地	242件

今年3年の1年間で発生した農作業死亡事故は242件、そのうち農業機械作業に係る事故は171件(約70%)、さらにそのうち機械の転倒・転落での事故が約50%を占めています。

農業者も労災保険に加入できる制度があります。詳細は最寄りのJA・県中央会等にお問合せください。

JAグループ / 全農

農作業を安全に行うために!

シーズン前にセルフメンテナンスを行いましょう!

ワンシーズン安心してご使用いただくため、点検・整備が必要です

- エンジンオイル交換
- 刈刃の点検・交換
- 走行部の点検・調整
- ベルト・チェーンの点検・調整
- 駆動部の点検・調整
- カッター刃の点検・調整

農業機械を安心してお使いいただくために、ぜひ点検を行ってください。

農業機械のことなら、JA農機センターにお任せください。

JAグループ / 全農



【JA全農】地域・JAでの広報誌やHPでの安全啓発

農作業事故を発生させないために

国内では農作業による事故が令和2年は250件以上発生しており、そのうち「農業機械に係る事故」が7割を占め、10万人当たりの死亡者数が過去10年で最も高い水準で発生しています。本ページでは特に稲刈り時期に多い「コンバイン」の事故事例と作業をする上での注意点をお伝えします。また、事故を未然に防ぐためのJAグループの取り組みを紹介します。

コンバインの事故事例として、走行時・後進時による「転落・転倒」が多発しています。隅刈り時にバックして、畦を乗り越え転倒してしまうという事故、道路をはみ出して横転してしまうという事故も発生しています。十分余裕を持った隅刈りや、コンバインは運転席から「死角」となる中で、特に後進時には勘に頼らず安全確認をし、確実な運転を心がけましょう。また、狭い場所では路肩を確認するなど慎重に作業を行いましょう。

【ここをチェック】
コンバインの後進時…

〇 畦かや路面の凸凹等による転倒・転落事故に十分注意しましょう。
〇 補助作業者は、コンバインの死角での作業に十分注意しましょう。

進行方向の安全を十分に確認し無理のない運転をしましょう。

出典：JA全農茨城県本部
「農作業安全情報」

他にも納屋からの出入りや、作業中の脱穀部への巻き込みという事例もあります。手こぎ作業中は、手袋や作業着の袖が引っかかる危険ですので、袖口が広がっている服は避け、正しい服装で作業を行いましょう。また、巻きついた葉を引っ張る際には、必ずエンジンを停止してから行いましょう。



【JA全農】安全教育

- 農業機械基礎講習・JAグループ農機検定における安全教育として、納品・試運転時に、現場の担当者が利用者へ安全指導できるように教育している。



【JA全農】セルフメンテナンス講習会

- セルフメンテナンスを行うことにより、使用時のトラブル減少により事故未然防止につながることや、機械の長持ちにつながるなど、講習会を通じ周知している。（DVD、YouTube活用）





【JA全農】農機展示会における 農作業安全コーナーの設置





課題・今後の取り組み

- 農作業死亡事故件数は2009年の409件以降、徐々に下降を続け、2019年には281件まで減少した。しかし、農業就業者10万人あたりの農作業死亡事故件数で見ると明らかな上昇傾向にあり、2019年では16.7件も増加している。農業就業者の高齢化の進行が死亡事故発生リスクを押し上げていると考えられる。加えて温暖化による熱中症対策についてもJAグループとして何ができるか検討を急いでいる。

- 熱中症対策強化の取り組み
- シートベルト装着率向上研修の企画
- 農作業事故体験VRの活用

主役は農業者
農業者参加による実践が大きな
課題となる。



J A全中の取り組み 安全対策に関するアンケート調査

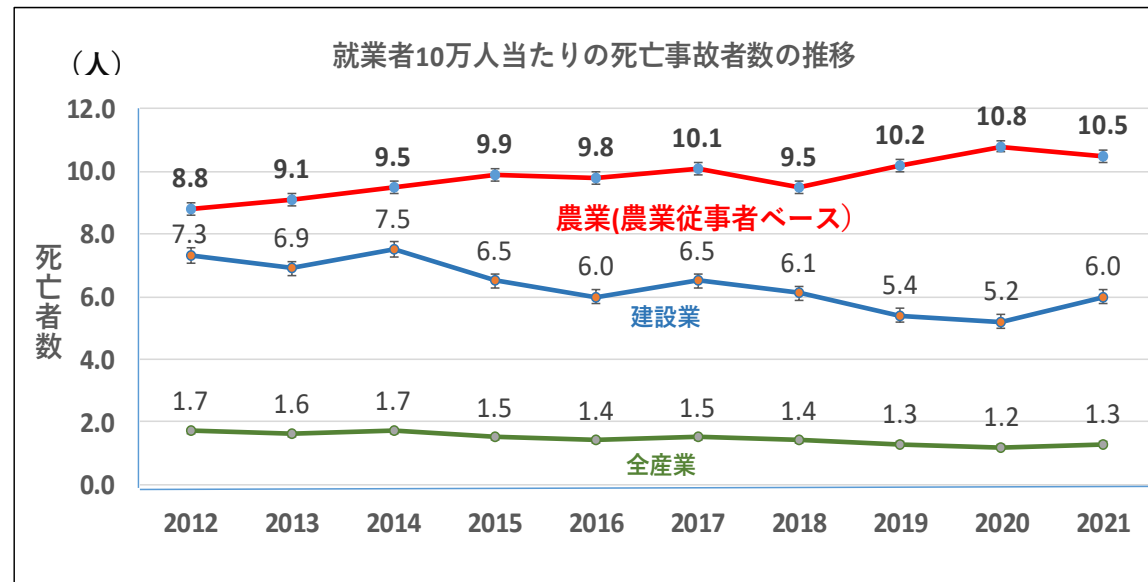
本調査は、農業分野における就業者10万人当たりの死亡事故者数が10.8人と極めて多いことを背景に（建設業では5.2人）、より効果的な安全対策を検討・推進するためにJA全中は三菱UFJリサーチ&コンサルティングの調査支援を受け、JAはだので実施した。

(2023年結果報告を引用)



J A全中の課題認識

- 農作業死亡事故は毎年300人前後で推移し、2020年には10万人あたりの死亡者数が過去最悪になった。農作業中の死亡事故の割合は2020年以降も他産業より高水準で推移し、2021年の農作業事故による死亡者は242人となっている。これら死亡事故のうち乗用型トラクターによる転倒・転落による事故が84人と最も多い。



出典：死亡者数 農作業死亡事故調査(農水省)、死亡災害報告(厚労省)
就業者 農林業センサス、農業構造動態調査(農水省)、労働力調査(総務省)

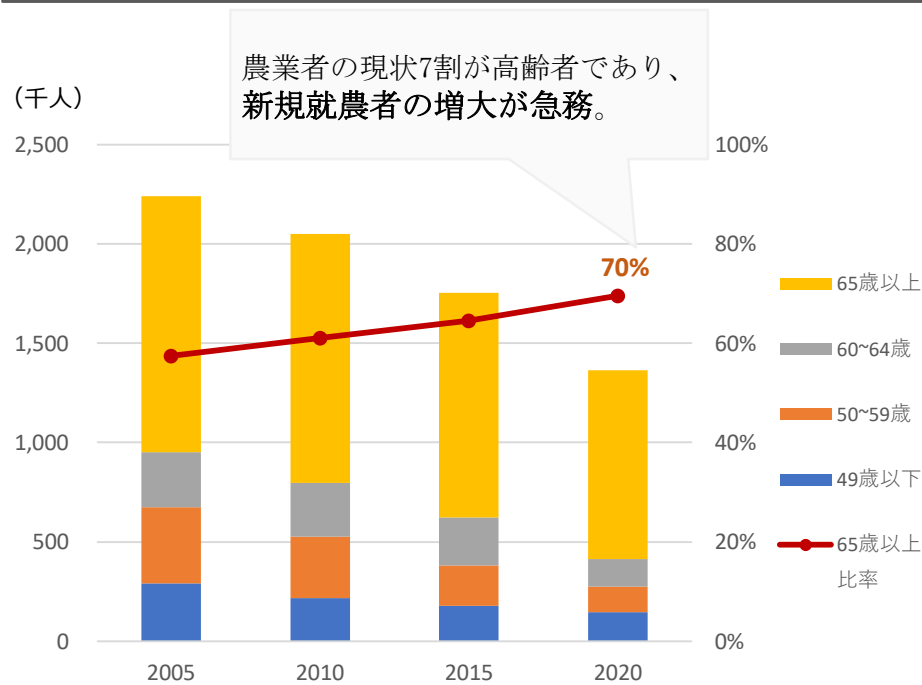
背景と目的



背景と問題意識：農業分野における事故の現状と課題解決の意義

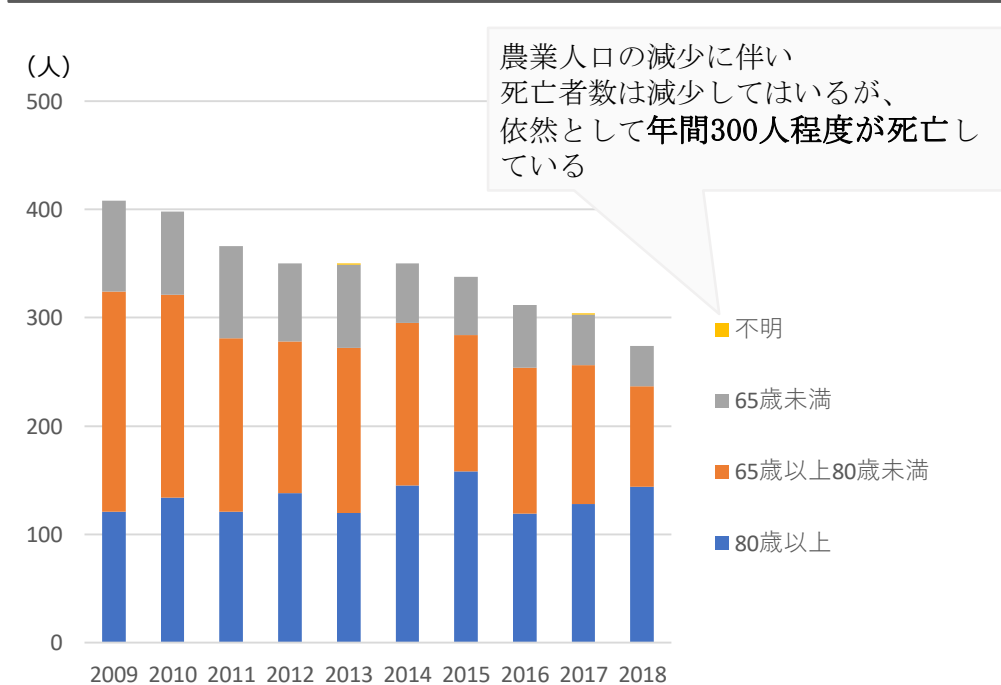
- 農業人口は急速に減少しており、現状7割が高齢者であることから、新規就農者の増大に向けた対策が急務です。
- 一方で、農作業死亡者数は年間300人程度に上り、現状の死亡者数で推移すれば新規就農者の参入を促すことは難しい状況です。
- 本事業では、近年注目されているナッジと呼ばれる手法を活用し、農作業安全対策を訴求するための資材開発・効果の実証を行うことを目的として実施しています。

農業従事者数の推移



(出所) 農林水産省「農林業センサス」
 (注) 農業従事者として、「基幹的農業従事者数」の推移を掲載

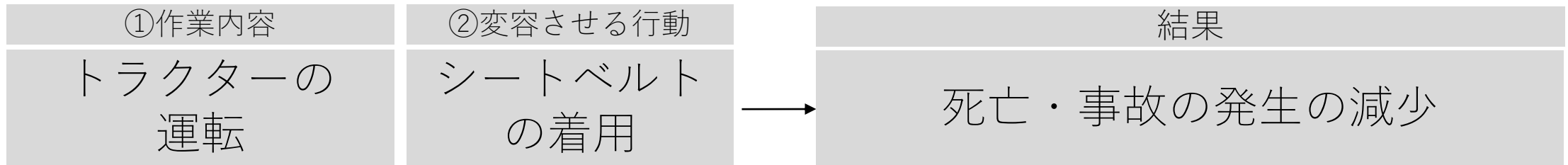
農業者の死亡人数



(出所) 農林水産省「農作業死亡事故調査」



- 農作業安全対策の種類は様々であることから、本事業では「トラクター運転時におけるシートベルトの着用」に焦点を絞って実施しています。
- 既存調査から、乗用型トラクター使用時における農業作業事故の発生割合が最も大きく、またシートベルト着用によって死亡事故を軽減できることが分かっています。



①参考：H29～R1年農業作業事故の類型

起因物	事故の型	件数	割合 ¹
1 乗用型トラクター	機械の転落・転倒	96	18%
2 コンバイン	機械の転落・転倒	18	3%
3 スピードスプレーヤー	機械の転落・転倒	15	3%
4 乗用型トラクター	巻き込まれ	23	4%
5 歩行型トラクター	巻き込まれ	15	3%
6 コンバイン	巻き込まれ	11	2%
7 乗用型トラクター	ひかれ	15	3%
8 歩行型トラクター	ひかれ	7	1%

(出所) 農林水産省「令和2年度農林水産業・食品産業における労働安全強化対策推進事業のうち新たな現場の作業安全対策の実現に向けた調査委託事業報告書」を一部加工

②参考：シートベルトの着用と死亡率

	死亡	傷害	合計	死亡率
シートベルト着用		2	2	0.0%
シートベルト非着用	装備有		2	
	装備無	3	3	60.0%
	装備有無不明	18	12	30
(出所) 同左	53	14	67	79.1%
合計	74	30	104	71.1%

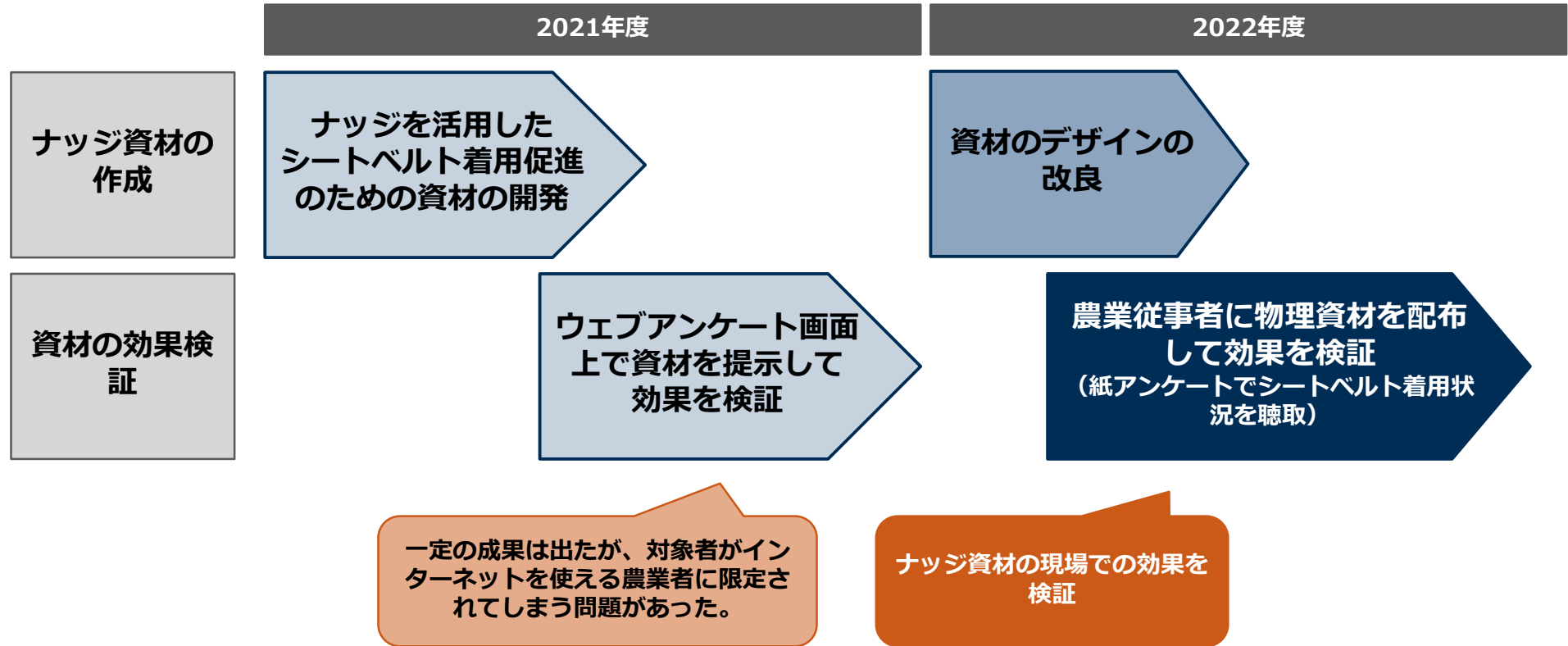


R3年度事業の調査実施事項・概要

昨年度のナッジ事業の取組と本年度事業の位置づけ

- 令和3年度の調査では、農業者が行動変容に至るまでのボトルネックを把握し、効果的と考えられる介入（ナッジ）を設計した上で、実際の行動変容に与える効果をウェブアンケートにより検証しました。
- しかし、令和3年度事業はあくまで簡易的な効果検証であり、対象はウェブアンケートの回答者に限られていた点が課題でした。
- そこで令和4年度事業では、農業従事者様に対して物理的なナッジ資材を配布する実証を行い、効果検証を行うことを目指しています。

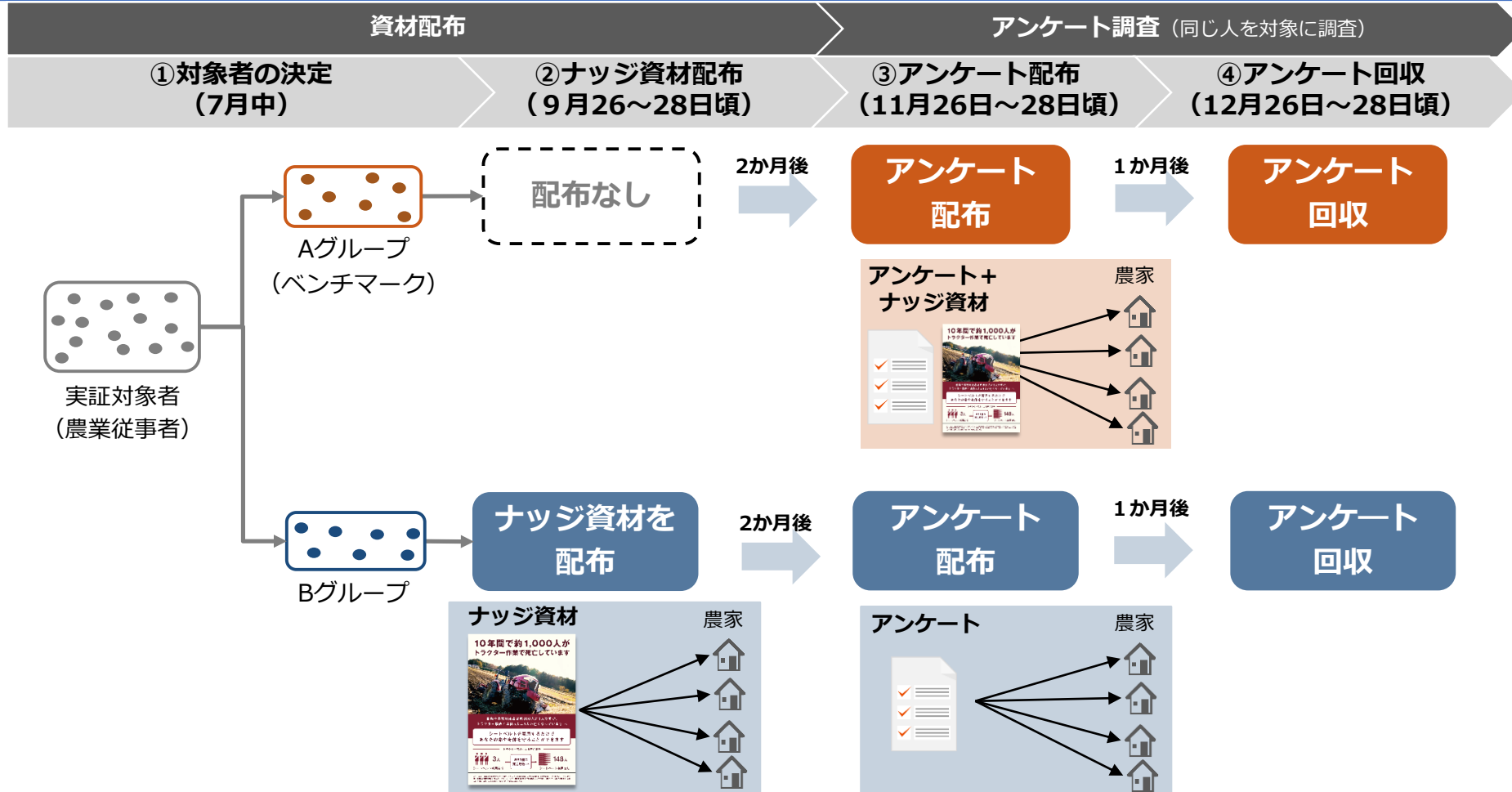
ナッジを活用した作業安全対策促進に関する取組





調査の全体概要

- 組合員様を2つのグループ（Aグループ、Bグループ）に分けた上で、Bグループに対してナッジ資材を配布いたします。
- 次に、約2か月後に、両グループに対して最近2か月間のトラクター乗車時のシートベルト着用状況についてアンケート調査を行い、結果をAグループとBグループで比較することで効果の検証を行います。





本調査によって目指す姿

- 本調査結果に基づき効果的な資材を配布していくことで、農業者様に事故なく安全に営農を続けて頂くことができ、経済面・人手面での損失防止や、将来的な地域の活力増加にも繋がっていくことが期待できます。
- 今回の調査で全国展開に向けた課題も整理されますので、全国的な農作業安全の推進にも寄与いたします。

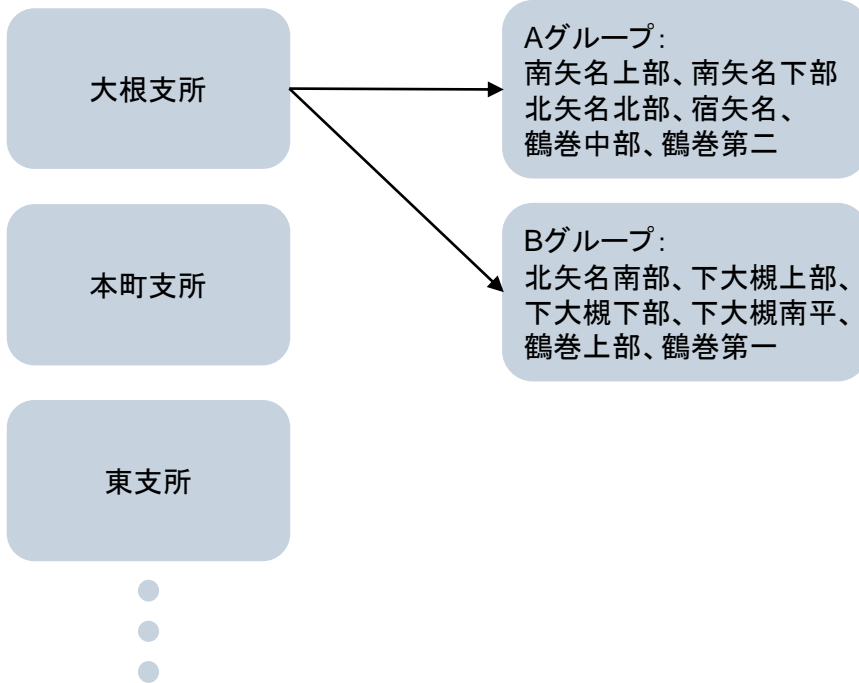




グループ分け及び回収数

- JAはだのの組合員を、支所内の生産組合別にAグループとBグループに分けて実施した。
- 組合員を処置群と対照群に振り分け、処置群には資材（チラシ）とアンケートを、対照群にはアンケートのみを配布した。
- 回収率は31%であった。

Aグループ・Bグループの分類方法



支所別の回収数

支所別	対象配布枚数	回収枚数	回収率
大根	393	86	22%
本町	151	66	44%
東	521	109	21%
南	282	93	33%
北	401	112	28%
西	505	223	44%
上	188	62	33%
合計	2,441	751	31%

※Aグループ・Bグループを合算した配布数・回収数を表している。



農作業安全対策に関するアンケート結果概要

「あなたはトラクターによる農作業中に「ヒヤリ」としたり、「ハット」するような経験をしたことがありますか？」

はい
48.8%

いいえ
51.2%

「あなたは、トラクターによる急な傾斜の運航はバックでの走行を行っていますか？」

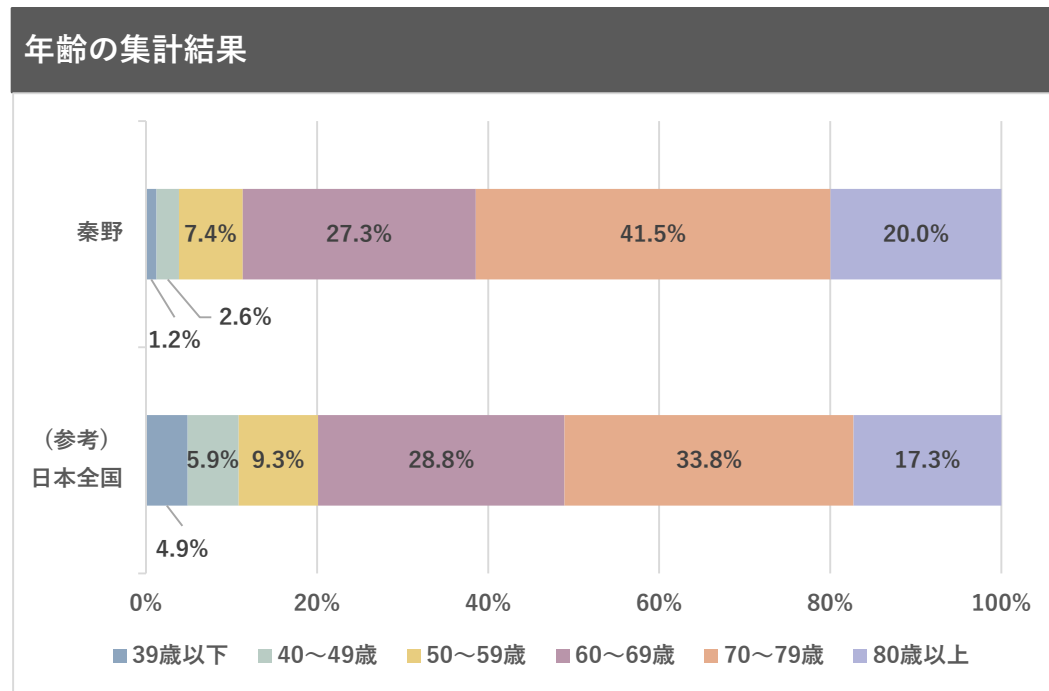
行っている
59.0%

行っていない
41.0%

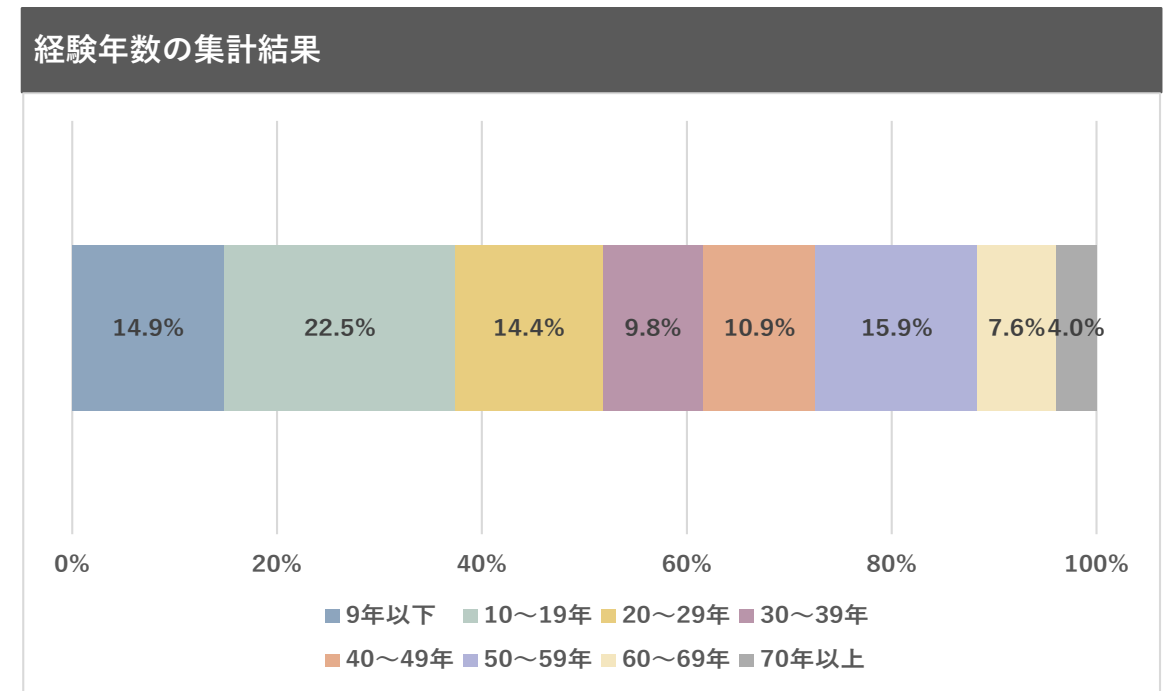


回答者の属性情報 -回答者の年齢と経験年数-

- 年齢：70代が41.5%と最も多くなっており、次いで60代の27.3%となっている。また、80歳以上も20%を占めている。日本全国の値と比較すると、本アンケートの回答者は特に70代の割合が高いことが分かる。
- 農業経験年数：30年未満の回答割合が51.8%となっている。最も多い層は10～19年の22.5%、次いで、50～59年の15.9%、9年以下の14.9%となっている。



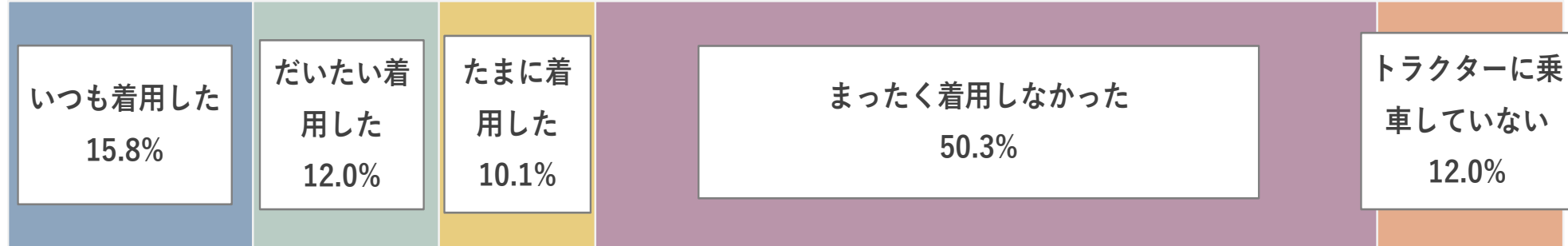
(注) 本アンケートの回答者数は726人であった。
 ※日本全国の値は2020年農林業センサスにおける基幹的農業従事者数に基づく。



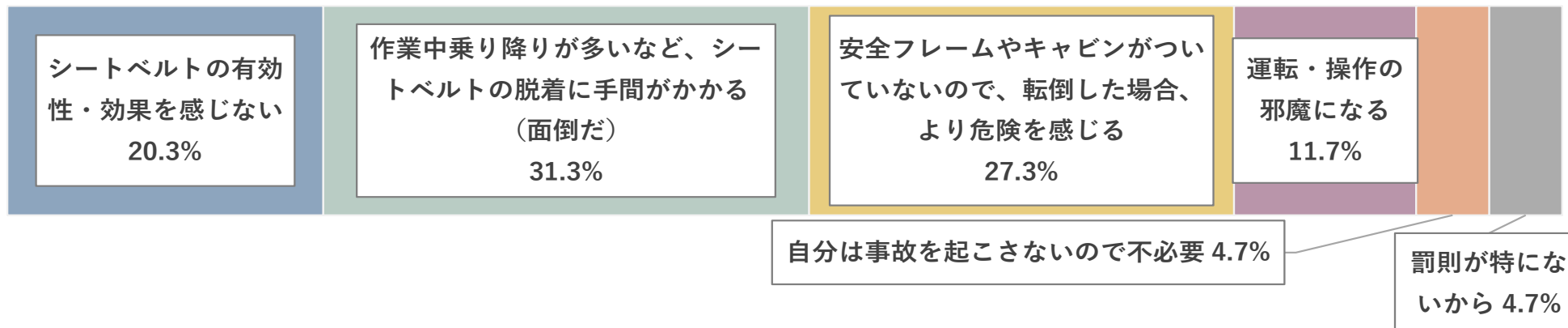
(注) 回答者数は631人であった。



「最近2 か月間で、トラクター乗車時にシートベルトを着用しましたか？」



「シートベルトを着用しない（着用したくない）理由は何ですか？」





アンケート結果を意識啓発のため発出

組合員の皆様へ

2022年11月～12月に実施した「農作業安全対策に関するアンケート」にご協力頂きありがとうございました。お陰様で751件のアンケートを回収することができました。（回収率31%）

ご報告は主な結果です。トラクター作業中のヒヤリハットは約5割が経験していましたが、トラクター運転時のシートベルト着用割合は約3割となり、重大な事故が発生する危険性が大きいことが確認されました。

皆様一人ひとりの大切な生活を守り、事故を減らすためにも、今後とも安全に気を付けて農作業をおこなって頂きますよう、お願いいたします。

2023年3月

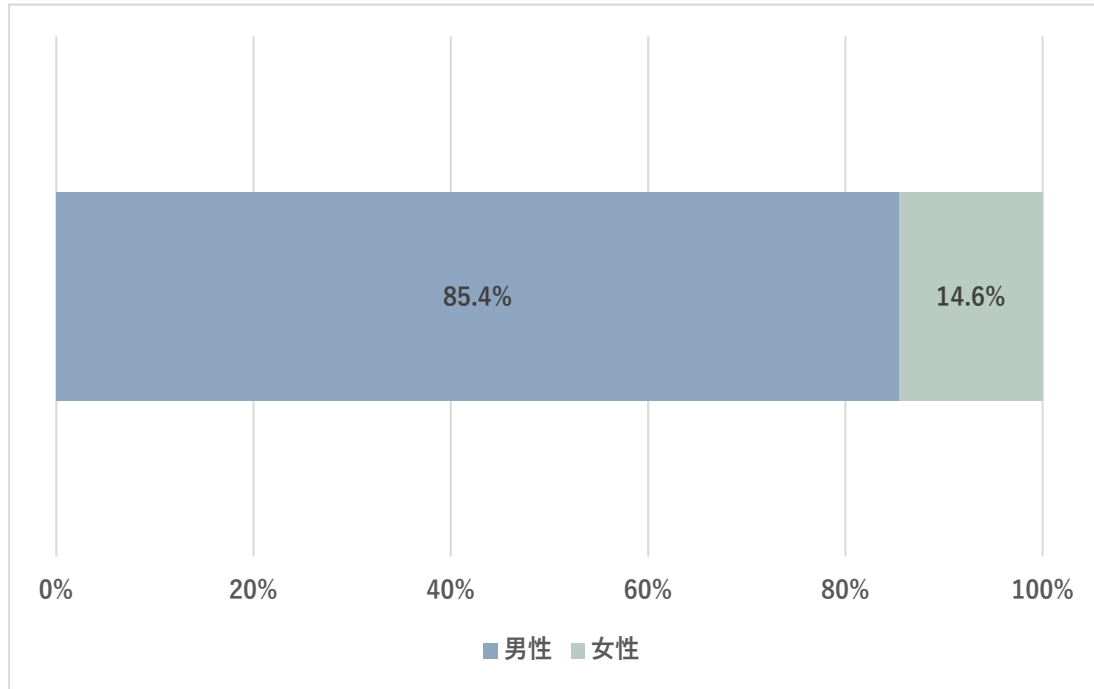
秦野市農業協同組合



回答者の性別と専業・兼業の別

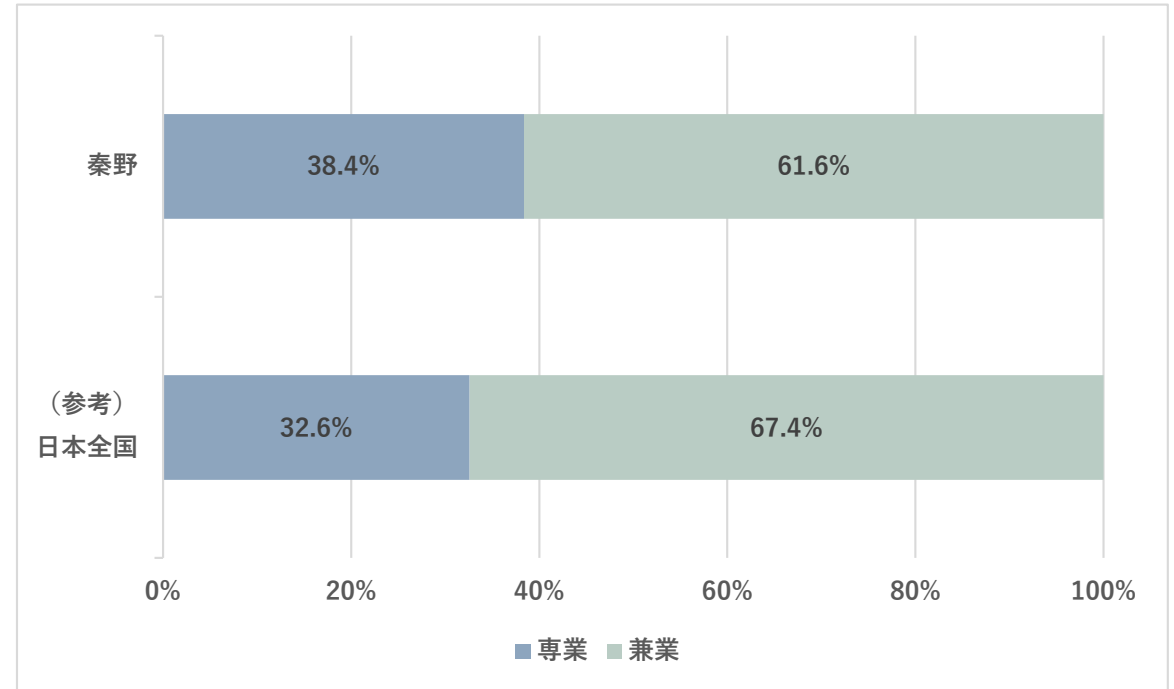
- 性別：男性の回答割合が85.4%、女性の回答割合が14.6%であった。
- 専業・兼業の別：38.4%が専業、61.6%が兼業であった。日本全国の値と比較すると、本アンケートの回答者は専業の比率が高いことが分かる。

性別の集計結果



(注) 回答者数は728人であった。

専業・兼業の別の集計結果



(注) 回答者数は646人であった。

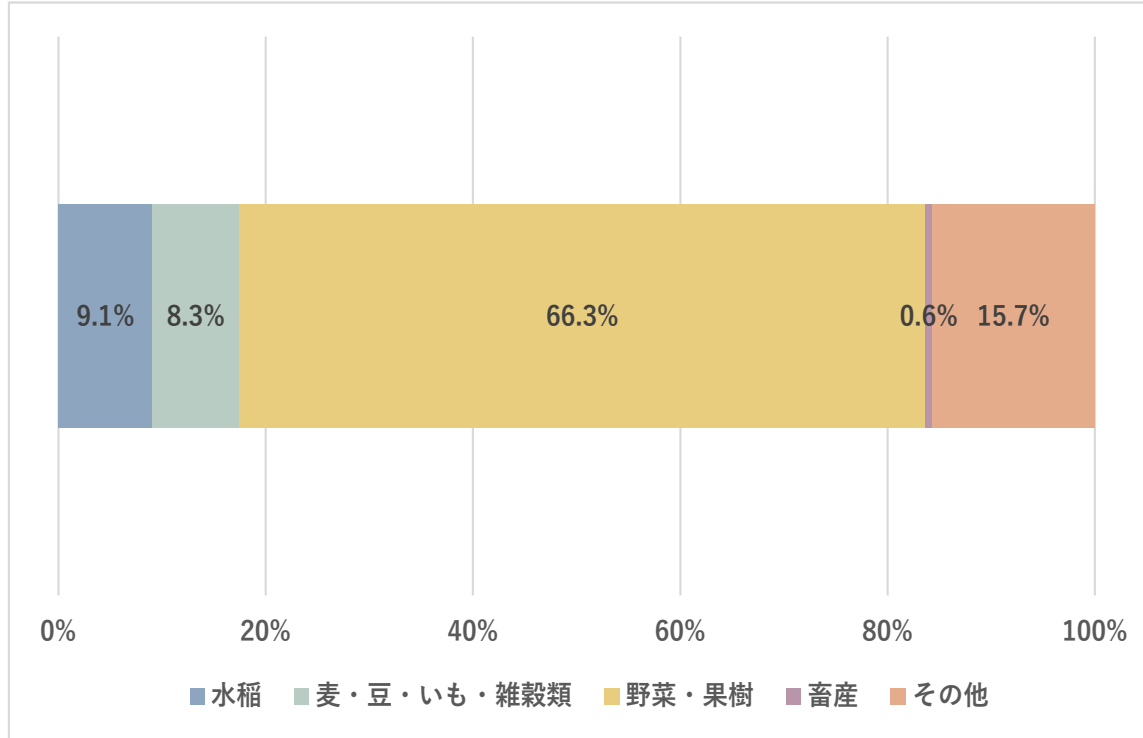
※日本全国の値は2019年農業構造動態調査における販売農家の専兼業別農家数に基づく。



回答者の主な農産物と経営面積

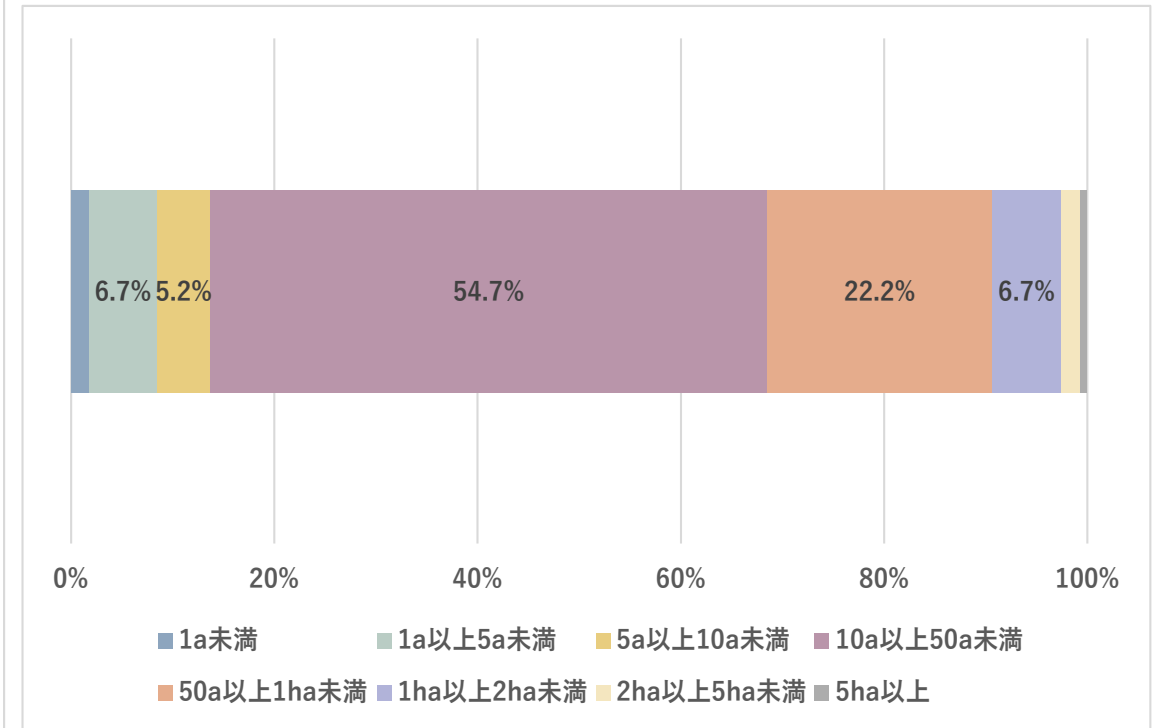
- 主な農産物：野菜・果樹の割合が高く、66.3% を占めており、次いでその他15.7%となっている。
- 経営面積：10a以上50a未満が最も多く54.7%となっている。次いで、50a以上1ha未満の22.2%となっている。

主な農産物の集計結果



(注) 回答者数は637人であった。複数回答は除外している。

経営面積の集計結果



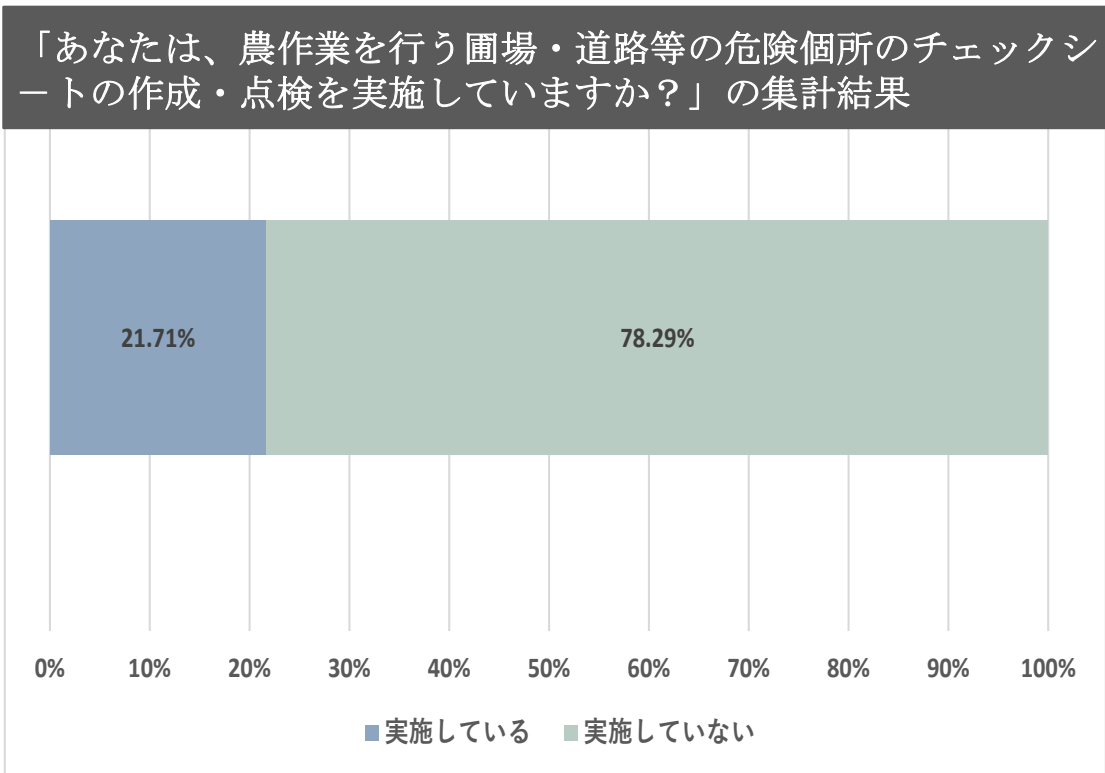
(注) 回答者数は612人であった。



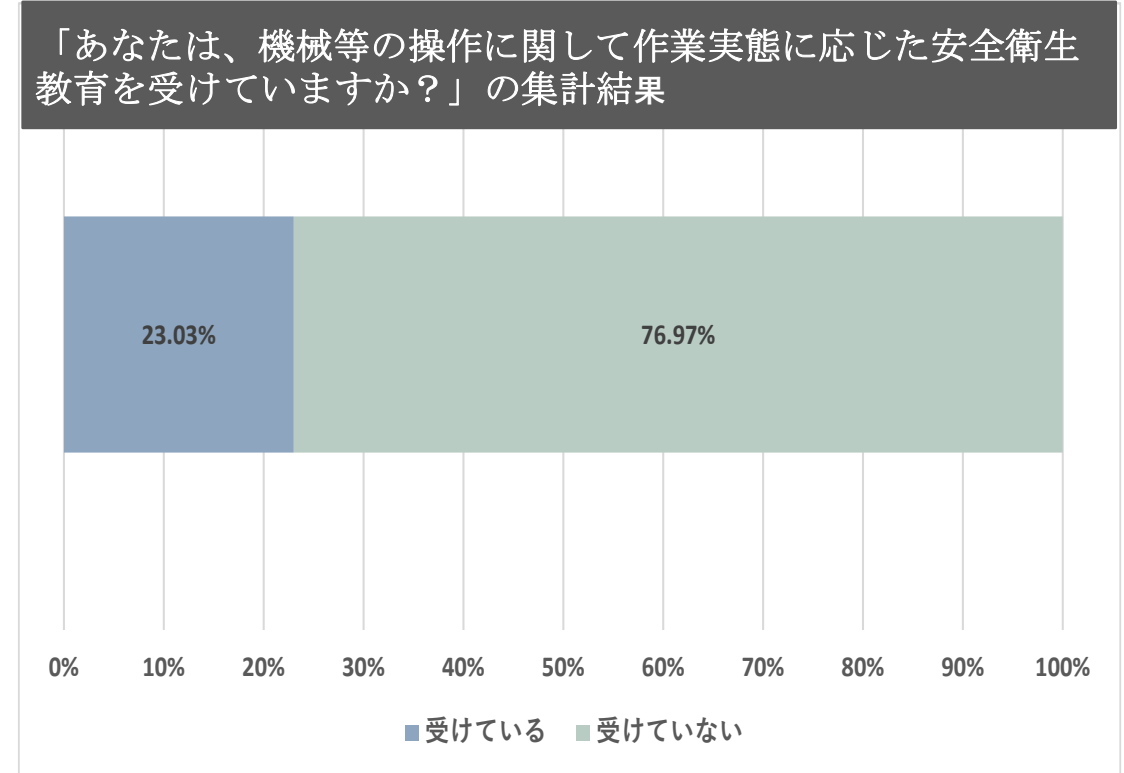
集計結果

①危険個所のチェックシートの作成点検・②安全衛生教育の受講有無

- 農作業を行う圃場・道路等の危険個所のチェックシートの作成・点検を実施について、21.7%が実施していると回答している。
- 機械等の操作に関して作業実態に応じた安全衛生教育を23%が教育を受けていると回答している。



(注) 回答者数は699人であった。



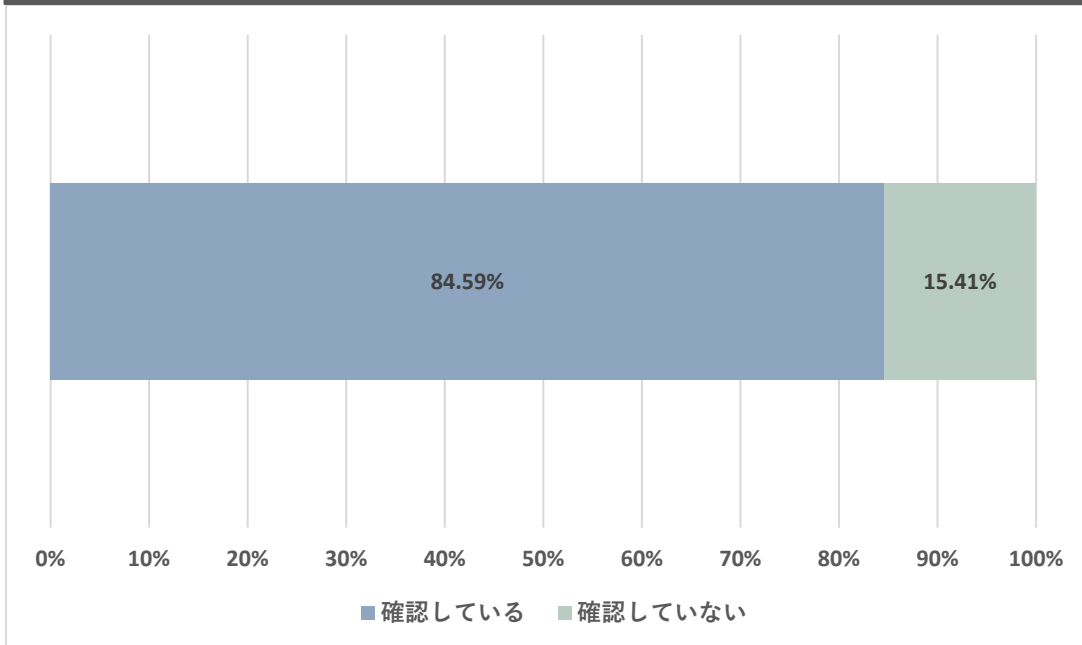
(注) 回答者数は698人であった。



運転前の体調確認・巻き込まれの対策措置

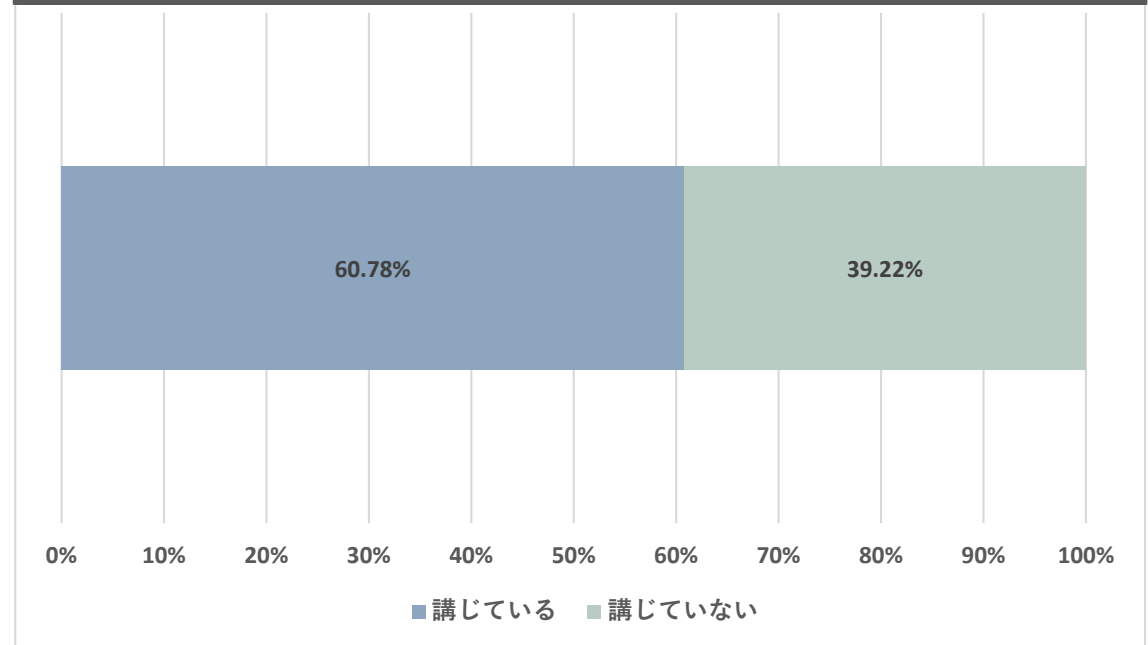
- 運転業務前の体調、飲酒の状況等の確認は、確認しているという回答が84.6%であった。
- 機械の駆動部のはさまれ・巻き込まれ防止の措置について、措置を講じているという回答が60.8%であった。

「あなたは、運転業務の前に体調、飲酒の状況等を確認していますか？」の集計結果



(注) 回答者数は687人であった。

「あなたは、機械の駆動部など、はさまれ、巻き込まれの恐れのある箇所には、覆いを設ける等の措置を講じていますか？」の集計結果



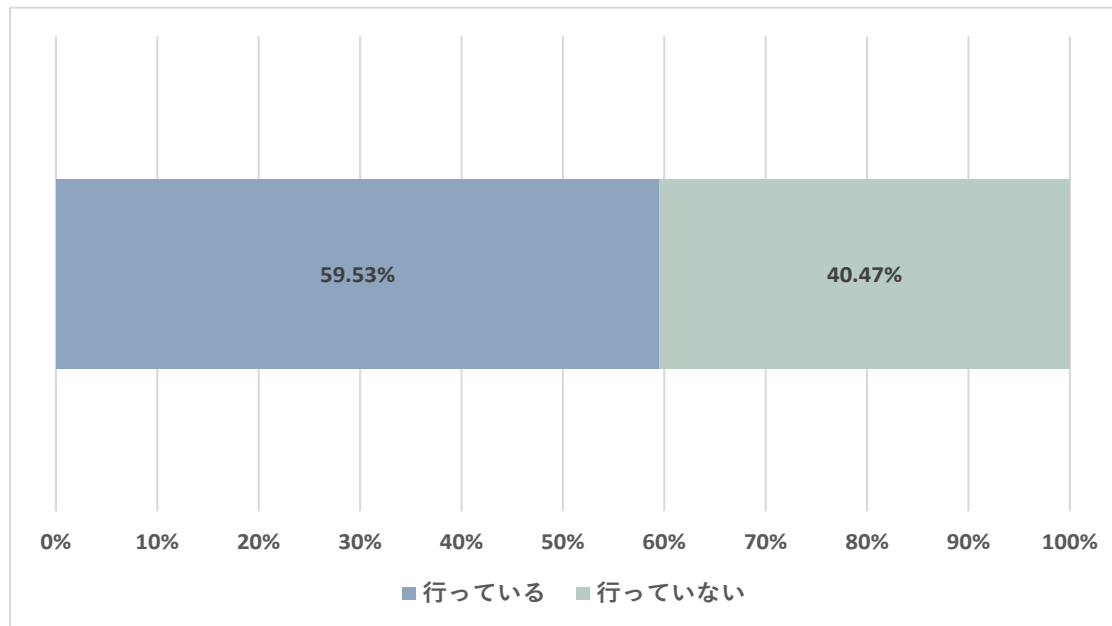
(注) 回答者数は667人であった。



危険個所の見える化・トラクターの利用状況

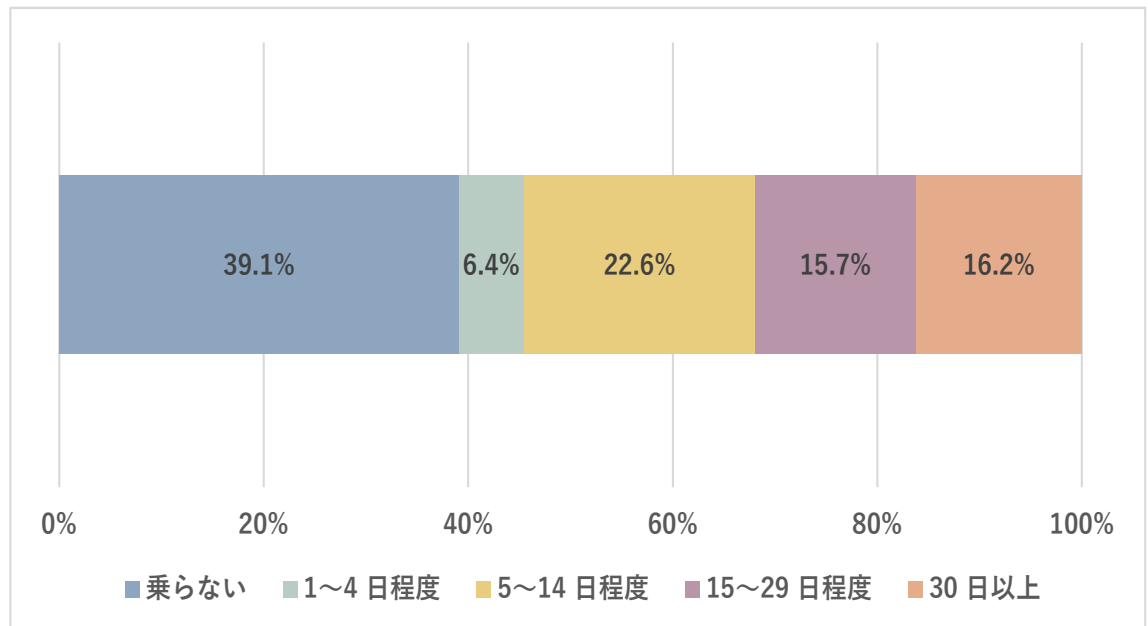
- 危険個所について見える化を図り、注意喚起を行っているかの回答結果を以下に示す。59.5%が行っていると回答している。
- トラクターの利用状況についての回答結果を以下に示す。トラクターを利用していると回答した割合は60.9%であった。1年間で5日～14日以上利用する割合が22.6%と最も大きかった。

あなたは、危険個所について見える化を図り、注意喚起を行っていますか？ の集計結果



(注) 回答者数は676人であった。

トラクターに乗る日は1年間に何日くらいありますか？ の回答結果



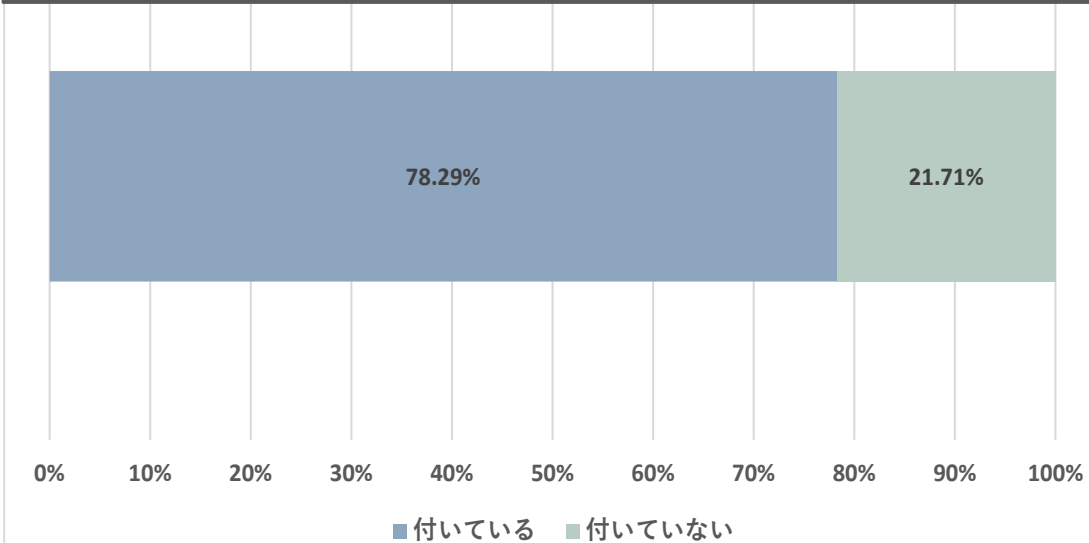
(注) 回答者数は629人であった。



安全フレーム・キャビンの有無 トラクターへのシートベルト設置状況

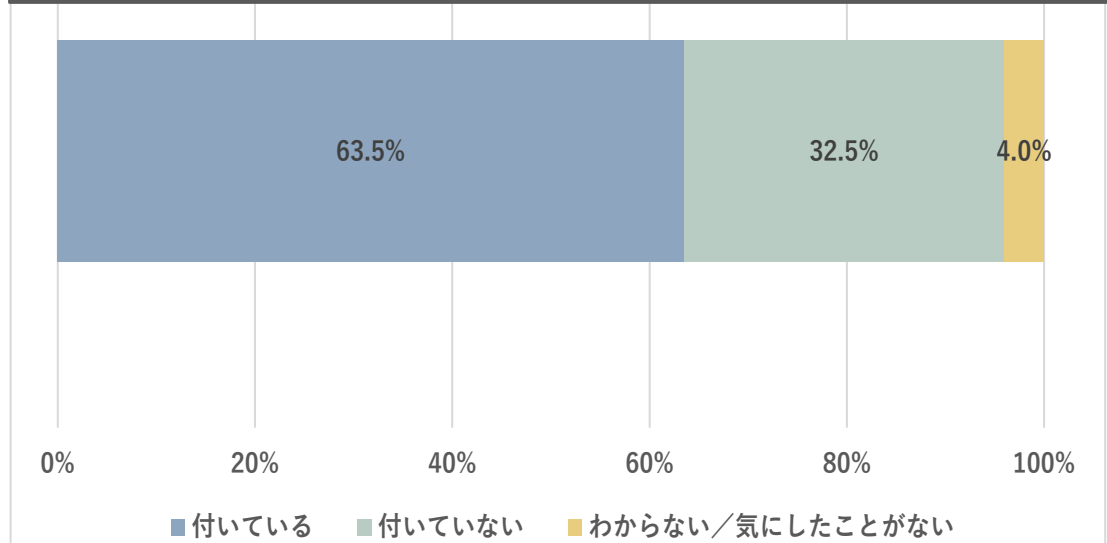
- 使用しているトラクターに安全フレームやキャビンがついているかの回答結果を以下に示す。78.3%がついていると回答している。
- トラクターへのシートベルトの設置状況を以下に示す。シートベルトの設置率は60%を超えている。

あなたが使用しているトラクターに、安全フレームやキャビンは付いていますか？ の集計結果



(注) 回答者数は387人であった。

あなたが使用しているトラクターに、シートベルトは付いていますか？ の回答結果



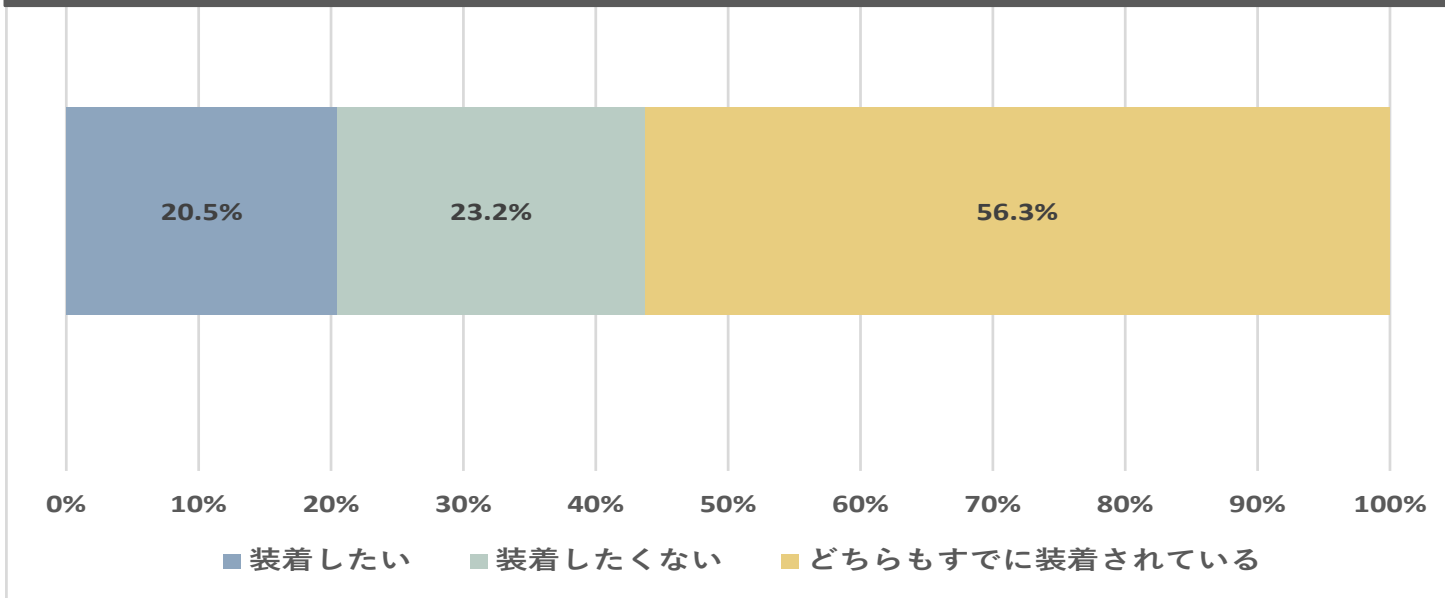
(注) 回答者数は397人であった。



安全フレームやシートベルトの有償装着の意向 最近2か月でのシートベルト着用状況(29頁参照)

- 安全フレームやシートベルトをトラクターに有償で装着したいかという意向について以下に示す。
 - 56.3%が「どちらもすでに装着されている」と回答している。
 - 装着したいと回答したのは20.5%、装着したくないと回答したのは23.2%であった。
- 最近2か月のシートベルト着用状況は、368人からの回答で29頁で示したとおり。
 - 「いつも着用した」人は15.8%であった一方、50.3%が全く着用しなかったと回答していた。

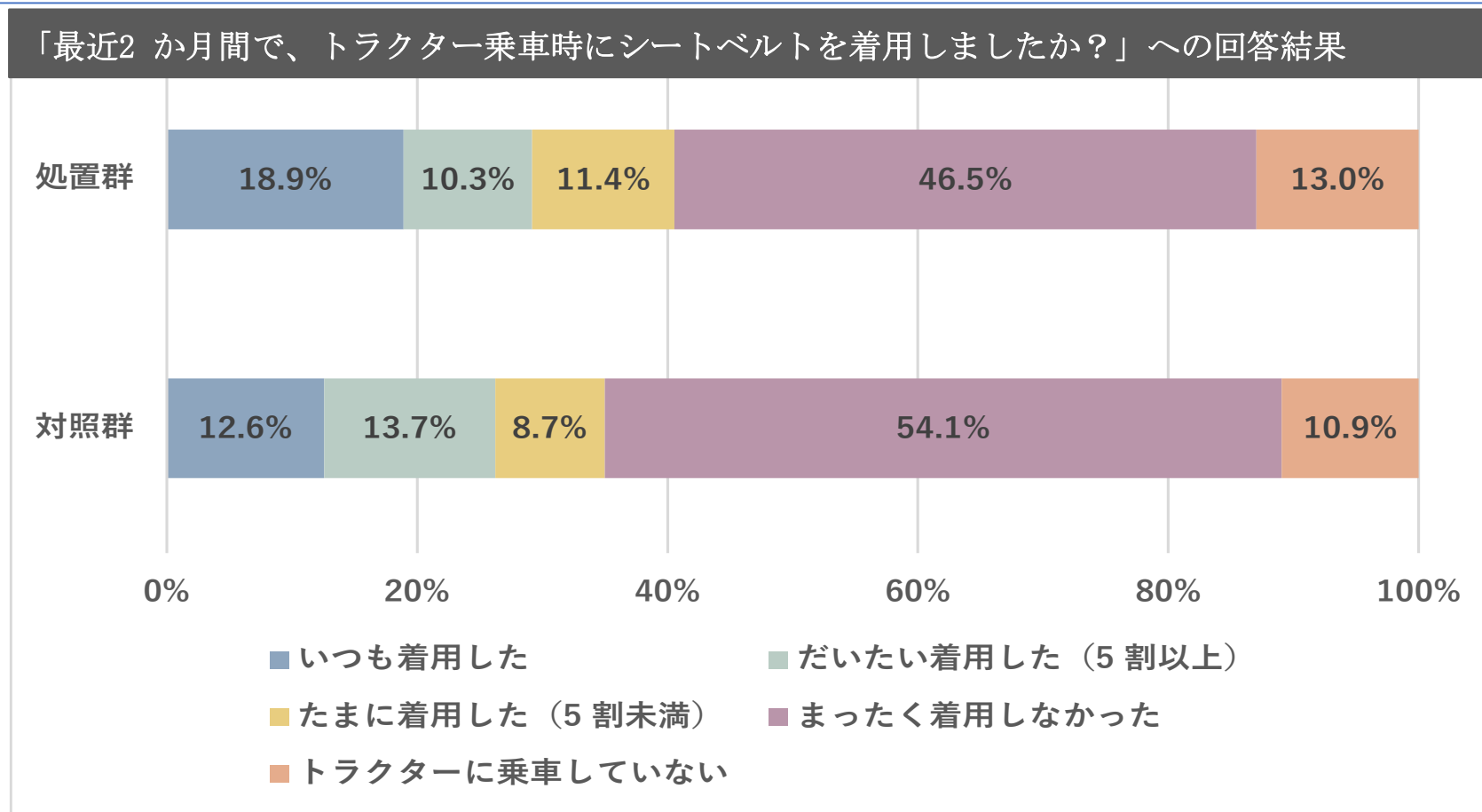
安全フレームやシートベルトをトラクターに有償で装着したいと思いますか？ の集計結果



(注) 回答者数は366人であった。

最近2か月でのシートベルト着用状況 処置群（資材配布群）と対照群の比較

- 処置群・対照群それぞれの最近2か月のシートベルト着用状況を以下に示す。
 - 「いつも着用した」の回答割合は処置群で18.9%、対照群で12.6%であった。また、「いつも着用した」「だいたい着用した」「たまに着用した」の合計は処置群で40.6%、対照群では35.0%であった。



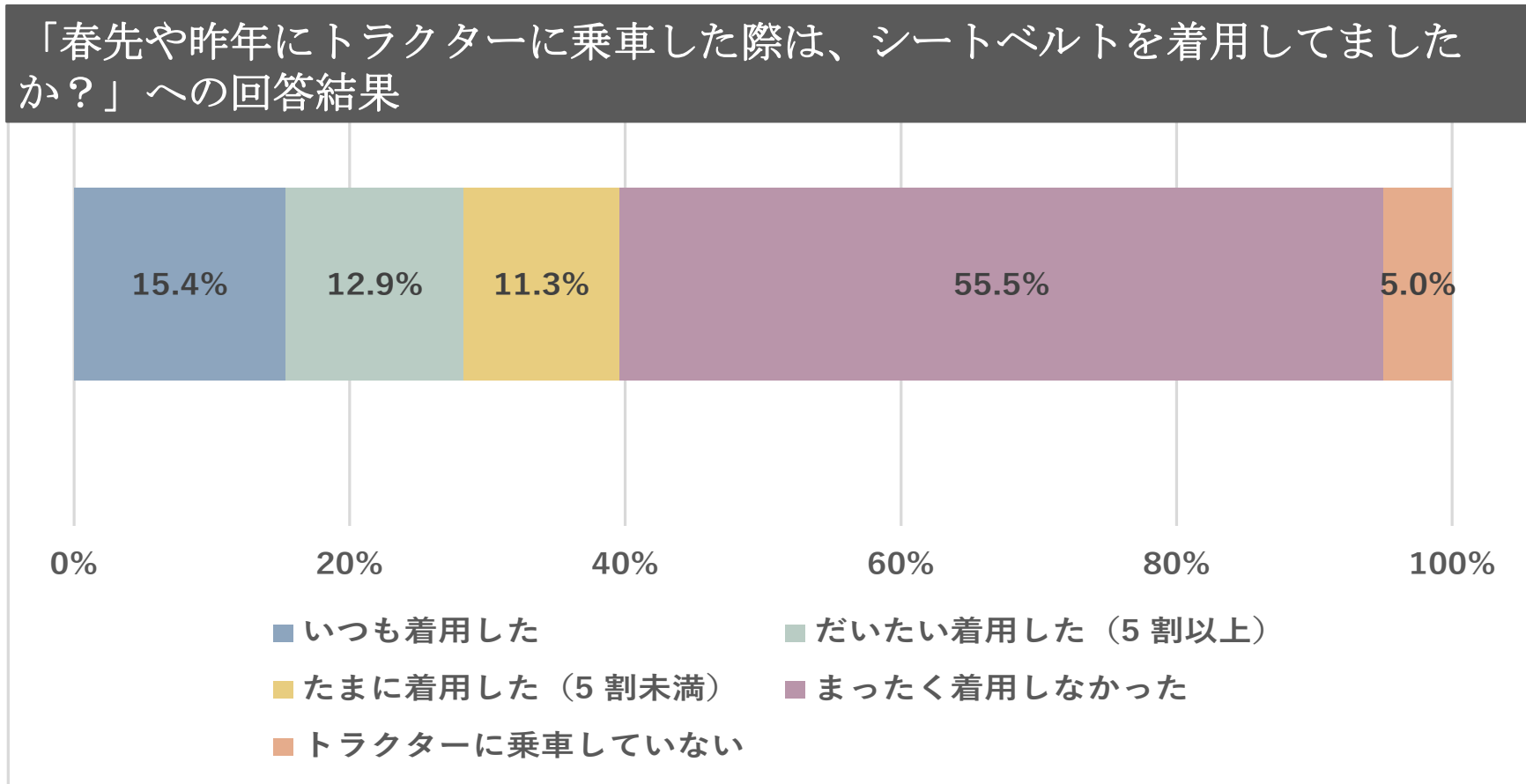
(注) 回答者数は368人であった。



春先や昨年のシートベルトの着用状況

■春先や昨年のシートベルト着用状況を以下に示す。

- 「いつも着用した」割合が15.4%であった一方、まったく着用しなかった人の割合は55.5%であった。



(注) 回答者数は364人であった。



考察結果と課題 -1

- トラクター運転時のシートベルト着用割合は約3割程度※であり、7割近くは着用していなかった。
(※いつも着用+だいたい着用の合計割合)
- 一方で、トラクター作業中のヒヤリハットは約5割が経験しており、重大な事故が起こる危険性は大きいことが確認された。
- シートベルトを着用したくない理由として、「作業中の乗り降りが多いなど、シートベルトの脱着に手間がかかる（面倒だ）」が31.3%と最も高く、次いで、「安全フレームやキャビンがないため、転倒した場合、より危険を感じる」の回答割合が高かった。



考察結果と課題 -2

- 着用が習慣化してしまえば面倒な気持ちも減ることから、「面倒でも一回着けてみよう」と思ってもらうための継続的な意識づけや、トラクター作業の危険性の訴求が重要と考えられる。
- 実際に、**資材を配布したグループでは着用意向・着用状況が改善**していたことから、こうした地道な資材配布による意識づけは有効と考えられる。
- また、そもそもシートベルトが付いていないトラクターを利用している割合も3割程度存在することから、装備されていない人への安全対策についても別途検討する必要性が示唆された。
- 課題解決には、さらなる自助・共助・公助によるそれぞれの役割発揮が求められる。



ご清聴ありがとうございました。